

西欧中世の幸福：『聖レオナルド伝』にみる至福の人

小野 賢一

はじめに

2015年9月の国連サミットの「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に含まれる「SDGs（エスディーゼーズ）」（持続可能な開発目標）の取り組みが2016年1月に開始された。「持続可能な開発のための2030アジェンダ」とは、2030年までに持続可能でより良い世界を目指すための国際目標である。SDGsは17項目で構成されているが、その三つ目の「すべての人に健康と福祉を」という項目は、人々の幸福にかかわる内容である。幸福は全地球市民の達成すべき目標とされたのである¹。

だが、幸福について考えるのは、容易ではない。なぜなら、古代ギリシア哲学者、中国哲学者、社会学者、心理学者、歴史学者の考える幸福は似て非なるものだからである。それだけではない。文化によって幸福概念は異なり、共通の尺度で計測することが難しい。一例を挙げると、大半の日本人の幸福度が低いのは、日本人が完全な幸福の高みを望まず、ほどほどこそ幸福と考えているからだともいえる²。このような考え方の人にとっては、これから幸福になるのが真の幸福なのであって、今現在幸福であることは不幸の始まりに過ぎない。日本人の多くが考える幸福という概念が、西洋人の考える幸福という概念の一步手前の状態であるとするならば、その文化的差異を考慮して問いを立てるべきであろう。「あなたは幸福か」ではなく、「あなたは幸福に少しずつ近づいているか」と問わねばならない。この問いに肯定的に回答した人々こそが日本的な文化環境の下での幸福な人といえるのではないか。デンマークは国家プロジェクトとして幸福の国というイメージを作り出す努力をしており、幸福は観光産業のセールスポイントとされている³。意外なことにデンマークは、うつ病患者が多いという。本当に幸福なのだろうか。そもそも幸福とは定義できるものなのだろうか。上述の「SDGs（エスディーゼーズ）」（持続可能な開発目標）の「すべての人に健康と福祉を」という目標の達成度を考えると、衰え次第に不健康になってゆく老人は幸福から遠ざかる存在であるように見える。だが、古代ローマのキケロによると、幸福は老境に入らないと理解できぬものらしい⁴。このように、相反する立場があり、学問的に幸福の定義をすることは、極めて困難なのである。まず、議論するにあたって、幸福という広い概念のどの部分を扱うかが問題となる。

本稿は、幸福全体どころか、西欧中世の幸福全体すら論じるものではない。本稿の調査対象は、『聖レオナルド伝』の史料群のなかでも最も早い時期に編纂された『聖レオナルド第一伝記』⁵（11世紀前半）に厳しく限定するものとする⁶。その全文を検証したが、残念ながら happy や well-being という概念は見当たらなかった。比較的近い概念として beatus（至福な、至福の人）を見つけることができた。それゆえ、第一の課題として、『聖レオナルド第一伝記』のなかに現れる「至福の人」（beatus）という概念について検討したい。

上述の「至福の人」（beatus）という概念は、彼岸的、反現世的、厭世的概念とってよ

い。ところが、「SDGs (エスディーゼーズ) (持続可能な開発目標) のなかの「すべての人に健康と福祉を」という目標は、幸福という広い概念の中でも、かなり現世的な部分を対象とした *well-being* という概念に近いように思われる。*well-being* という概念自体、定義がはっきりしないのだが、世界保健機関 (WHO) 憲章の前文によると、「健康とは、病気や虚弱でないというだけでなく、肉体的、精神的、社会的にも満たされたよく生きる状態である (筆者試訳) (Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.) という。つまり、*well-being* という概念は、部分的に「健康」に近い意味を有することは間違いない。したがって、第二の課題として、「健康」という概念について、『聖レオナル第一伝記』に現れる用例を取り上げ、検討したい。

第三の課題として、至福は果して凡人に到達可能な境地なのかという疑問に答える手がかりとしての序文の機能に着目したい。一見して実現不可能な至福の実現に向けての処方箋を我々はそこに見出すことになる。『聖レオナル第一伝記』は、封建社会の只中の神の平和 (*Pax Dei; de Dieu*) 運動の時期に、リモージュ司教の主導で匿名の編纂者によって編まれた⁷。その時期に信仰と秩序維持を目的として同司教によって整備されたサン・レオナル参事会教会の構成員、即ち在俗参事会員 (*chanoine séculier*) に向けられた聖人伝編纂者の思慮深い配慮を我々はその序文から読み取ることが可能である。そして至福という到達不可能に思える概念を読み手の身近にあるものを感じさせるこの聖人伝の構成の巧みに気づかされるであろう。

第1章 至福の人の定義

まず、「至福」という概念について考察したい。フランス語で「至福」は *béatitude*、形容詞の「至福の」及び名詞の「福者」は *béat, béate*、英語で「至福」は *beatitude*、形容詞の「至福の」は *beatific*、「福者」は *blessed* である。ダンテの『神曲』において、地獄篇 (*Inferno*)、煉獄篇 (*Purgatorio*)、天国篇 (*Paradiso*) の三つの階梯の最初の二つの導き手はウエルギリウスだが、最後の天国への導き手の名は、ベアトリーチェ (*Beatrice*) である。その名は、ダンテを至福に導くのに相応しい名前だといえる。至福という概念は、キリスト教文化圏の人々にとって、かなり身近な概念なのである。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである⁸」というマタイ書の「山上の垂訓 *Sermo in monte*」の一節の「幸い」という言葉は、ウルガータ版で確認すると、*beatus* となっている⁹。マタイ書だけでなく、ルカ書においても「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなた方のものである。今飢えている人々は、幸いである、あなた方は満たされる」という一節が見受けられる¹⁰。ここでも「幸い」という言葉は、ウルガータ版で確認すると、*beatus* が用いられている¹¹。「心の貧しき者」とは、経済的に貧しい者を指し示すのではなく、霊的な意味で貧しいものを指し示す¹²。つまり、*beatus* とは、世俗的な

意味での幸福ではなく、靈的な意味での幸福をあらわす概念である。

次に「福者」という用語の確立についてみてゆく。イエズス会士ヘルトリングによると¹³、列聖手続きの変化には、大きく分けて三つの段階があるという。一つ目の大きな画期は、993年のアウグスブルク司教ウルリッヒ（ウダルリクス）の列聖の段階、二つ目の画期は、1170年に教皇アレクサンデル 3 世が教書アウディウィームスを発布し、列聖権を教皇権に留保した段階、三つ目の画期は、1625年に教皇ウルバヌス 8 世が多くの教令によって現代の列聖の形態をほぼ完成させた段階である。初期には、聖人認定を指し示す列聖（Canonisatio）という用語が確立しておらず、移葬（Translatio）、奉挙（Elevatio）が用いられた。用語の確立が十分になされていなかったのである。同様に、*beatus* と *sanctus* の明確な区別も、三つ目の段階の後によく確立した。1661年に教皇アレクサンデル 7 世が、「聖人ではなく、差し当たって福者の称号を与える」という意味の *ut interim Beatus nuncupetur* という文言を用いたが¹⁴、これはのちに定式化される。この段階で、初めて福者の称号が公式に確立したといつてよい。*beatus* は、現在では福者の意味で使われることが多いが、それは 1661 年以降のことであり、『聖レオナル第一伝記』の書かれた 11 世紀前半の段階では、*sanctus* とほぼ同じ意味で使われていたと考えられる。

第 2 章 至福の人と健康

well-being には、「健康」という意味もあるが、21 世紀に入り *well-being* 学の隆盛とともに、各地にシンクタンクや研究所が創設されただけでなく、様々な影響があらわれてきたように思われる。例えば人々のニーズに合わせて大小の多様なスポーツクラブが各地で見受けられるようになった。そこでは老若男女を問わず、人々は筋力トレーニングに励んでいる。筋力トレーニングといえば、かつて男らしさを追求するボディービルや女らしさを追求するダイエットが想起されたが、21 世紀の筋力トレーニングの大半はジェンダーと無関係に、*well-being* の実現に向けて行われているように感じられる。それゆえ、筋力トレーニングと併せて、心と身体の二項対立を止揚すべく、ヨガやホットヨガも盛んにおこなわれているのであろう。健康な肉体は古代ギリシアのポリスの成員にとって義務であったが、「SDGs（エスディーゼズ）」（持続可能な開発目標）の取り組みの開始によって、今まさにグローバルな規模で全地球市民の義務とされようとしている。第二の課題として、*well-being* の実現にとって重要な要素とされる「健康」という概念について、『聖レオナル第一伝記』に現れる用例を取り上げ、検討したい。

『聖レオナル第一伝記』の次の一節によると、至福の人（*beatus*）レオナルは、次の文章の如く健康を回復させる手助けをしてくれるという。

そしてレオナルの徳のうわさは、全ガリアに激しく大きくなり、それゆえ病んでいる多くの人々が健康を回復するために群がった¹⁵。

レオナルは、自分の健康ではなく、他人の健康を回復させて至福に至るのである。次の

箇所にも同様の健康回復の記述が見受けられる。

多くの人々に、レオナルドは、主の名において健康を取り戻した。それに加えて彼らにレオナルドは、肉の食べ物と霊的な食べ物を分け与えた¹⁶。

肉の食べ物は世俗的な健康の回復のために必要であり、霊的な食べ物は精神の健康の回復のために必要である。その両方を自分ではなく、他者に至福の人レオナルドは与えるのである。

また至福の人 (beatus) レオナルドは、次の文章の如く世俗的な治療と霊的な治療の両方を行うとされている。

レオナルドは完全に悪魔を遠ざけ、耳の聴こえない人々に聴覚を取り戻し、目の見えない人々に視力を取り戻し、足の不自由な人々に歩みを取り戻し、同じく自分に向けてやって来るすべての体の弱った人々に健康の治療を与えた¹⁷。

利他的なアガペーの精神を持った人こそ、至福の人と呼ばれるに値するという考え方が窺われる。次の文章で記されるように医療の技術では治療できない病からの回復が問題とされる。

それゆえ心配し悲しんだ王は、このことの助けを多くの医者から得ようと努力した。そして様々な医療の技術が適用されても、医者たちのうちの誰も治すことができなかった¹⁸。

それでは、如何にして治療を施すのだろうか。その疑問に次の一節は答える。

つまりあなたが私に尋ねる植物の薬を私は知らないが、主イエス・キリストの名を呼ぶことで病人から様々な病気を私は撃退する¹⁹。

この文章では、至福の人レオナルドは神の奇蹟の力で治療を行うとされている。荒唐無稽な話と一笑に付すこともできようが、終末医療のホスピスが舞台であったならば、至福という考え方は末期患者に希望を与えるかもしれない。実際、医療技術の発達していない中世においては死にゆく人を看取るしかなかった。そのため病院の起源となる施療院が建てられていた。施療院における幸福とは何か。よく生きるための **well-being** ではなく、至福であったように思われる。ヨーロッパ中世の聖人伝『聖レオナルド第一伝記』では、**well-being** な状態から見放された人々にとっての拠り所が至福であったといえよう。

第3章 至福への処方箋

beatus=sanctus であるならば、至福へ至る道は、あまりに険しい。至福へ至る可能性が少しでもある者は、聖職者の中でも『聖ベネディクト戒律』(Regula St. Benedictini) や『聖アウグスティヌス戒律』(Regula St. Augustini) に厳格に従う修道士や律修参事会員 (chanoine régulier) などの律修聖職者 (clergé régulier) に限られ、俗人のみならず、『アーヘン掟則』(Institutio Canonicorum) に従う参事会員たちも排除されてしまう。在俗聖職者 (clergé séculier) は断念するしかないように思われる。だが、そうではなく、至福へ至る処

方箋としての序文にいくつかの抜け道が示されている。律修聖職者以外でも至福の人の伝記を「読み、書き、語り、報告する」という行為によって、救済されるのである。まず、至福の人の伝記を「読む」という行為について、検討したい。『聖レオナル第一伝記』の序文に次の如く記されている。

聖人たちの称賛されるべき記憶が聖なる教会で朗読されるときはいつも、信徒たちの誠実な献身が良いものからより良いものへと段階的に増やされ、キリストの軍隊が悪魔に対して並々ならず強固にされる²⁰。

朗読という行為によって、段階的に至福へ近づく希望が読み手に与えられている。この聖人伝が記されたのは、フェーズが横行する封建社会の秩序を回復すべく、ミレニアムの神の平和 (Pax Dei; Paix de Dieu) 運動が開始された時期である。この時、リモージュ司教がリモージュ司教管区の平和を回復させる力を秘めた守護聖人として崇敬を創出し、祀り上げたのがレオナルであった²¹。最後の審判への恐怖とキリストの再臨への希望が入り混じる中でこの文章は記された。人々はレオナルの加護で悪魔に打ち勝ち、最後の審判を乗り切り、天上のイェルサレムに入り至福に至ることを希求した。引用箇所は、その希望へと読み手を駆り立てる内容である。

次に至福の人レオナルの伝記を「書く」という行為について検討したい。『聖レオナル第一伝記』の序文には以下のように記されている。

ゆえに真実の共同に従って私たちが聖人たちから知ることになることは何であろうとも、語り、記述しなければならない。そして少しも嘘を付け加えないのがふさわしい。聖人たちのために真実を語ることで私たちは神に気に入られるように、嘘を語ることで私たちは神にも聖人たちにも気に入られないからだ²²。

書くこと(記述すること)によって神や聖人に気に入られて天上のイェルサレムへの道が開かれるならば、厳格な生活に耐えることのできない在俗聖職者にも至福へ至る可能性は残されていよう。

続いて『聖レオナル第一伝記』の序文のなかから、至福の人の伝記について「語り、報告する」という行為について叙述された一文を抜粋する。

従って聖人たちの偉業、いやそれどころか私たちの助けになるために、聖人たちのなかの神の行いを私たちは語り、報告する。そして私たちは神の行いが感嘆すべき秘蹟であることを否定しない²³。

至福の人レオナルについて語り、報告することは、レオナルを通じて、神の業を語り、報告することになるという。以上、「読み、書き、語り、報告する」ことで、至福なる人レオナルを介して、在俗聖職者も至福に至る可能性を示唆する聖人伝の序文の記述を確認した。「読み、書き、語り、報告する」ことの実践の推奨は、この聖人伝の読み手に向けて書かれた助言である。次に聖人伝の読み手の実践とレオナルの至福に至る実践が如何に異なるか考察したい。レオナル自身は俗世を放棄するほど厳格な生活を送っていた様子が、『聖レオナル第一伝記』の本文のなかの次の一節で描写されている。

しかし実際には私は高い地位に置かれて地上の王に従順であるよりも、むしろ身を投げ出して私の神に仕えることを選んだこと、司教の冠を求める者たちにそれを気前よく与えることを選んだことを、私は知っています²⁴。

上述のこの聖人伝の本文からの引用によると、レオナル自身は、神に仕えて厳格な生活を送ることを望むあまり、司教位という聖界の栄達さえ犠牲にしたとされている。この本文の行為は、在俗聖職者(*clergé séculier*)には模倣しえない境地であり、律修聖職者(*clergé régulier*)のなかでも、真に求道的な精神の持ち主のみが到達し得る境地である。だが、序文によってこの本文の高すぎる目標は弱められ、読み手を安堵させる。在俗聖職者は一段低い行為、即ち至福の人レオナルの行為を「読み、書き、語り、報告する」だけでよいのである。それは多くの人々にとって実践し得る行為である。このように序文では在俗聖職者にも実践可能な至福への処方箋が提示されている。至福の人(*beatus*)ではなくとも、至福に近づくためのヒントが、聖人伝の本文に先立ち、まとめられているのが、序文であるといえよう。

西欧中世のすべての聖人伝に、このような序文が附されているわけではない。それでは、何故至福への処方箋が『聖レオナル第一伝記』に必要とされたのかという点について、12世紀後半に編纂されたリムーザン地方のオーレイユ律修参事会(*L'ordre des chanoines réguliers d'Aureil*)の『聖ゴーシェ伝』の序文との比較から考えてみたい。オーレイユはレオナルと同じ司教座権力を支える支柱として機能していたが、『聖ゴーシェ伝』の序文には至福への処方箋は見受けられない。オーレイユは隠修的共同体が起源の律修参事会(*chapitre de chanoines réguliers*)あったのに対し²⁵、一方でサン・レオナル参事会教会は在俗参事会(*chapitre de chanoines séculiers*)であった。『聖レオナル第一伝記』が編纂された1030年代には共住制(*cénobitisme*)の基盤となるプレバンドさえも十分に確立していない状況であった。それが確立するのは、1060年代である²⁶。『聖レオナル第一伝記』の次の一節に描かれたレオナルの行為は在俗参事会員(*chanoine séculier*)にとっては厳格すぎるように感じられたに違いない。

従ってレオナルは、少なくない時間礼拝堂に出頭し、最も厳格なる食べ物によって自分自身を強制した。さらに彼は断食によって肉体を苦しめ、祈りと徹夜の勤行に精を出した²⁷。

レオナルは、厳格な食事規制と道徳律によって至福に至るのである。この点については、オーレイユのような律修参事会やシトーのような厳格な修道会では実践可能であろうが、共住制(*cénobitisme*)に不可欠なプレバンドの未確立のサン・レオナル参事会教会の在俗参事会には到底実践できるものではなかった。

紀元千年の封建社会のなかで、王権の及ばぬロワール川以南の地域では、司教座と修道院が中心となって地域の秩序維持が推進された。その代表的な運動が神の平和(*Pax Dei; Paix de Dieu*)運動である。この運動を推進するうえで切り札として、リモージュ司教によって当該管区の最重要拠点として司教座(*église cathédrale*)に次ぐ規模の参事会教会(*église collégiale*)に発展することを期待して整備されたのが、サン・レオナル参事会教会であっ

た²⁸。同司教の主導で『聖レオナル第一伝記』が編纂された²⁹。この聖人伝が編纂されるまでレオナルに関する如何なる聖人伝も編まれておらず、創建の縁起さえほとんど知られていない有様であった³⁰。『聖レオナル第一伝記』の序文は、初めてレオナルの聖人伝が編纂されたことを記念して、そして聖人伝を通じて主体的に聖人と霊的コミュニケーションをとることを促して、今後大いに躍進する可能性を秘めた在俗参事会(chapitre de chanoines séculiers)に向けて送られた実践的な助言と励ましであったといえよう。

小結

至福の人と健康という概念をヨーロッパ中世の聖人伝『聖レオナル伝』の史料群のなかでも最初期に編纂された『聖レオナル第一伝記』(11世紀前半)の中から抽出し、考察した。そして至福への処方箋としての序文の機能に着目し、読み書き語り(報告し)、神を讃えるという聖人伝に対するスピリチュアルなかわり方について考察した。そしてそれが、レオナル崇敬の拠点のサン・レオナル参事会教会の在俗参事会員(chanoine séculier)にとって、実践的な助言と励ましの役割を担っていたことを指摘した。

現世主義ではなく、死と向き合い、あの世をも含んだ幸福、それが至福であるが、それは中世の聖人伝や施療院のなかだけの問題ではなく、恐るべき感染症の蔓延で多数の死者が出ている今、21世紀の終末医療のホスピスの看取りの精神にも、それが継承されているという点を看過すべきではないだろう。

本稿は、JSPS 科研費研究プロジェクト(課題番号 20K01068)の助成を受けた。

1 このようなグローバルな状況に応える試みとして、愛知大学人文社会学研究所では伊集院利明教授によって古代ギリシア哲学者、中国哲学者、社会学者、心理学者、歴史学者から成る共同研究プロジェクトが組織された。そして、その成果の一端は2020年11月28日(土)に開催されたシンポジウム「幸福を考える—東洋、西洋、実証研究—」で報告された。筆者は、歴史学(西欧中世史)の立場からこのシンポジウムに参加した。本稿は、そのシンポジウムの報告内容をまとめたものである。

2 内田由紀子『これからの幸福について』新曜社、2020年、67頁。著者は、こころに関する学際的研究を行うべく、京都大学に2007年4月に設立された「こころの未来研究センター」に所属している。アカデミズムの内外の研究の垣根が取り払われているように感じられた。

3 マイク・ヴァイキング(枇谷玲訳)『デンマーク幸福研究所が教える「幸せ」の定義』晶文社、2018年参照。我が国だけでなく、世界中で幸福を研究するシンクタンクが設立されている。

4 キケロ(中務哲郎訳)『老年について』岩波文庫、2004年。

5 Société des Bollandistes (éd.), *Vita S. Leonardi Nobiliacensis, Acta Sanctorum Bollandiana* (Nov.) 3, Brussels, pp.149-155. 以下で *Vita S. Leonardi* と略記する。

6 Cf. Arbellot, *Vie de S. Léonard, solitaire en Limousin*, Paris, 1883; B.Barrière (dir.), *Saint Léonard de Noblat*, Limoges, 1995.レオナルの最初の伝記は、11世紀前半の神の

平和運動期に編纂された。この点については、拙稿『『聖レオナル伝』(11世紀前半)の成立：神の平和運動とのかかわり』『愛大史学—日本史学・世界史学・地理学—』第30号、2021年、55-78頁。以下で『『聖レオナル伝』(11世紀前半)の成立』と略記する。12世紀については、拙稿「12世紀初頭のサン・レオナル参事会教会に於ける律修化・巡礼・教会制度」『史林』史学研究会、93巻3号、227-462頁。

⁷ A. Poncellet, *Commentarius praeuius (Acta Sanctorum, nov. III, p. 139, ch. 2)* 『『聖レオナル伝』(11世紀前半)の成立』57-58頁。

⁸ 共同訳聖書実行委員会編『新共同訳 中型引照つき聖書／旧約聖書続編つき』2015年(訳文の初版1987年)参照。以下で『新共同訳聖書』と略記。引用箇所は「マタイ書」(5,3)『新共同訳聖書』6頁。聖書協会編『聖書協会共同訳聖書 旧約聖書続編付き 印小・中付き』日本聖書協会、2018年においても *beatus* は、「幸い」と訳出されている。

⁹ *Beati pauperes spiritu, quoniam ipsorum est regnum caelorum. (Secundum Matthaeum: 5,3)* Cf. Kurt Aland, Barbara Aland (éd.), *Novum Testamentum Latine*, Deutsche Bibelges, 1984, p.8.

¹⁰ 引用箇所は「ルカ書」(6,20-21)『新共同訳聖書』112-113頁。

¹¹ *Beati pauperes, quia vestrum est regnum Dei. Beati qui nunc esuritis, quia saturabimini. (Secundum Lucam: 6,20-21)* Cf. Kurt Aland, *op.cit.*, p.172.

¹² フランシスコ会聖書研究所編『聖書 原文校訂による口語訳』サンパウロ、2013年(A5判からB6判にリニューアルされた合本。合本の初版2011年)を参照。以下で『フランシスコ会聖書』と略記。『フランシスコ会聖書』では、「貧しい人々」とは「自分の貧しさを知る人」であって、「霊において貧しい人」を意味すると同書の(新)13頁の註で指摘されている。

¹³ *Lutwig Hertling, S.J., “Materiali per la storia del processo di Canonizzazione”, Gregorianum, 16(1935), pp.170-19.* 渡邊浩「翻訳 ルートヴィヒ・ヘルトリング(イエズス会)「列聖手続きの歴史に関する諸問題」」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』19号、2020年、17-49頁。

¹⁴ Cf. *Codex constitutionum quas summi pontifices ediderunt in solemnibus canonizationibus sanctorum a Johanne XV. ad Benedictum XIII. sive ab A. D. 993 ad A. D. 1729. Accurante Justo Fontanino qui lemmata & notulas addidit*, Rom Camera Apostolica, 1729.

¹⁵ *Crescebat autem vehementer per totam Galliam fama eius bonitatis, propterea que multi aegrotantes confluebant ad eum gratia recuperandae sanitatis. (Vita S. Leonardi, Ch.3)*

¹⁶ *Quibus in nomine domini salutem reddebat ;insuper eis escam carnalem et spiritalem tribuebat. (Vita S. Leonardi, Ch.3)*

¹⁷ *Fugabat quidem daemona, reddebat surdis auditum, caecis visum, claudis gressum, infirmantibus quoque universis ad se venientibus salutis praestabat remedium.*

¹⁸ *Proinde rex anxius et tristis huius rei auxilium a multis expetiit medicis ; quorum nemo valuit subvenire, adhibita arte multiplicis medicinae. (Vita S. Leonardi, Ch.5)*

¹⁹ *Herbarum denique medicamina, de quibus me interrogas, nescio, sed per invocationem nominis domini nostri Iesu Christi varias infirmitates ab infirmis repello.” (Vita S. Leonardi, Ch.6)*

²⁰ *Sanctorum laudanda memoria quotienscumque recitatur in sancta Ecclesia, fides devota fidelium de bono in melius gradatim augmentatur et christiana militia contra diabolium non mediocriter roboratur. (Prologus in Vita sancti Leonardi)*

²¹ 『『聖レオナル伝』(11世紀前半)の成立』55-56頁。

²² *Oportet itaque et loqui et scribi quodcumque ex ipsis cognoscimus iuxta cooperationis veritatem, neque admisceri convenit ullatenus falsitatem, quoniam, sicut in veriloquio pro illis Deo placemus, ita in falsiloquio quoque Deo illisque displicemus. (Vita S. Leonardi, pr.)*

²³ *Loquamur ergo et annuntiemus facta sanctorum, immo opera Dei in ipsis ad*

auxilium nostrum; et non negemus opus Dei admirabile sacramentum. (Vita S. Leonardi, pr.)

²⁴ Verum quia magis elegi abiectus servire Deo meo quam in sublimitate positus regi obtemperare terreno, largire eis qui eas cupiunt infulas antistitici; (Vita S. Leonardi, Ch.3.)

²⁵ 聖堂参事会改革運動の靈性に関する概要については、A.Vaucher, *La spiritualité du moyen âge occidental: VIIIe-XIIe siècles*, Paris, 1975, pp.87-91.

²⁶ 共住制の基盤の確立については、拙稿「11世紀中葉の聖レオナル崇敬と聖堂参事会の改革」『愛大史学—日本史学・世界史学・地理学—』第26号、53-68頁。特に54-56頁。以下で「11世紀中葉の聖レオナル崇敬と聖堂参事会の改革」と略記。

²⁷ Stetit igitur ibi tempore non modico coartans seipsum strictissimo cibo. Macerabat denique corpus jejuniis, insistens orationibus et vigiliis. (Vita S. Leonardi, Ch.9)

²⁸ 「11世紀中葉の聖レオナル崇敬と聖堂参事会の改革」53頁。

²⁹ 『聖レオナル伝』(11世紀前半)の成立」55頁。

³⁰ A. Poncelet, *Commentarius praeuius (Acta Sanctorum, nov. III, p. 139, ch. 2)* 『聖レオナル伝』(11世紀前半)の成立」57-58頁。